

30 スギ葉枯らし材生産・販売に関する一考察

盛岡営林署 ○ 川又 正美
植村 裕育
坂本 勲
三橋 誠
高野 正幸

1 はじめに

当署の平成6年度の直よう生産事業は、夏山2セット、冬山3セットで6,700^mの素材生産量を計画し、今日まで無災害で順調に事業実行中である。

資材における樹種別内訳では、スギが69%も占めており、現有資材のより高い付加価値の向上を指向するとともに、昨年5月10日に施行された、道路交通法の改正に伴うトラック等の過積載違反に対する規制が強化されたことにより、従来の木材輸送に多大な影響が現れているその実態を踏まえ、我が署としても今後の林産物収入の安定的確保ならびに木材需要の拡大を図るためにも、販売物件の軽量化が緊急の課題と判断し、この考察に至ったものである。

2 調査実行箇所の概要等について

1) 実行箇所の概要

- 箇所 紫波町 山王海国有林418い1 林小班
(盛岡市中心地より南西へ約3.2 KM 地点)
- 標高 400M 南向き緩斜面
- 樹種等 スギ 林齢 53年生
- 面積 約1.50HA (全面積3.69HA)
- 実行形態 直よう トラクタ全幹集造材作業
- 実行時期 夏山(8月~11月)
- 予定数量 400^m
- 資材内容 HA当たりスギ立木本数 472 本
(一樹) " スギ立木材積 298 ^m
1本当たり " 材積 0.65^m (断 30cm 樹高 19M)

* 実行に当たり、作業班と伐倒方向・集材方法ならびに山元巻立等にいたるまでの作業仕組や安全面について綿密に打合せを行い、実行に入った。



写-1 伐採前の林況

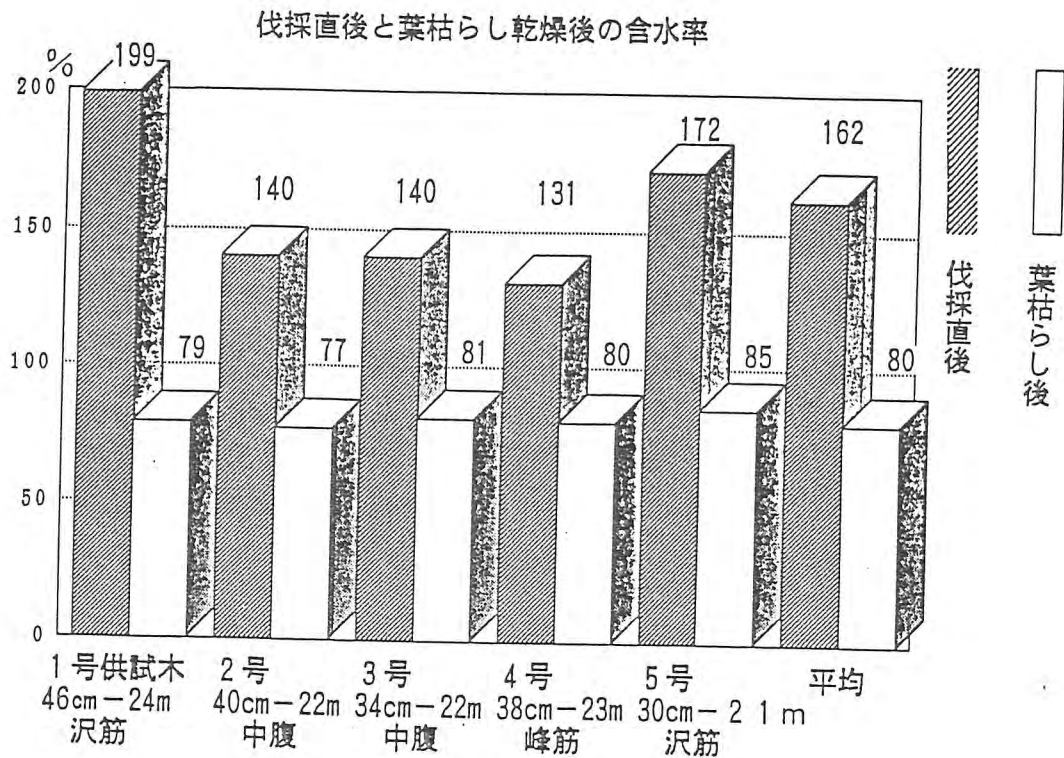


写-2 伐採後の林況

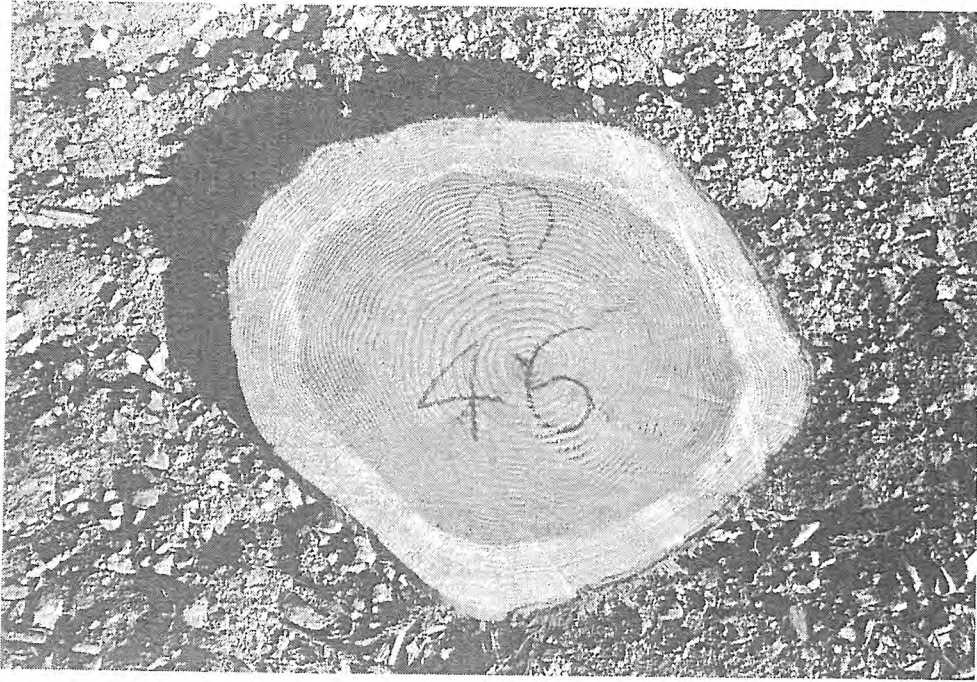
2) 供試木による伐採直後と葉枯らし後の含水率の調査

- 供試木については、林内から5本を選定し、伐採直後と約50日間後の含水率のデータ結果は次のとおりである。

図-1



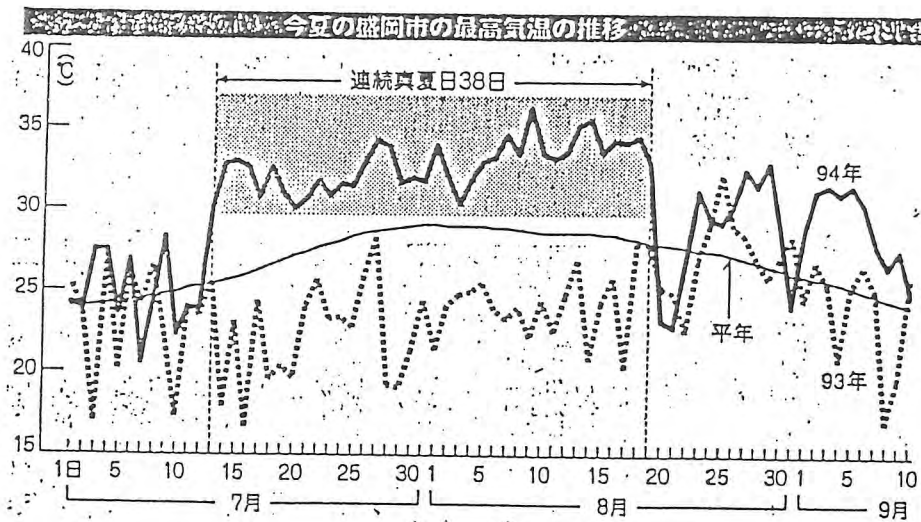
- 供試木伐倒年月日 平成6年 8月12日
 - 葉枯らし後供試体採取年月日 平成6年10月 3日
- * 沢筋付近の1号・5号の供試木については、伐採直後かなりの水分が含まれているが、その後の気象条件及び南向き斜面等による立地条件にも恵まれ予想以上の材の乾燥度合いとなり、全て基準値(100%)を満たし『ドライログ』として販売した。



写-3 供試木1号の伐採直後の輪切材

● 伐倒期間中における気象状況 (盛岡気象台の観測データ)

図-2



* 昨年は、7月13日に梅雨明け以来、連続真夏日が38日間も続くという異常気象下の年でもあった。

3 葉枯らし乾燥材（ドライログ）に対するアンケート調査結果について

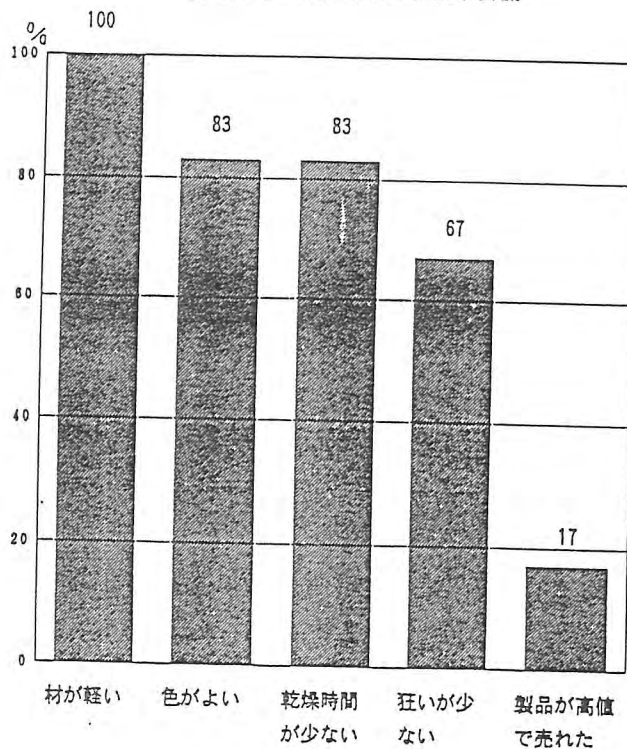
我が署に取り引きのある木材関係業者26社に対し次のようなアンケート調査を実施したところ17社からの回答をいただき集計した結果は次のとおりである。

図-3

設問番号	項 目	回 答	
①	貴方は、ドライログということばを聞いたことがありますか。	あ る 92%	な い 8%
②	盛岡営林署でドライログを生産、販売していることを知っていますか。	知っている 92%	知らない 8%
③	盛岡営林署のドライログを購入したことがありますか。	あ る 50%	な い 50%
④	ドライログ製品を使用した工務店等の評判について。	良 い 75%	変わらない 25%

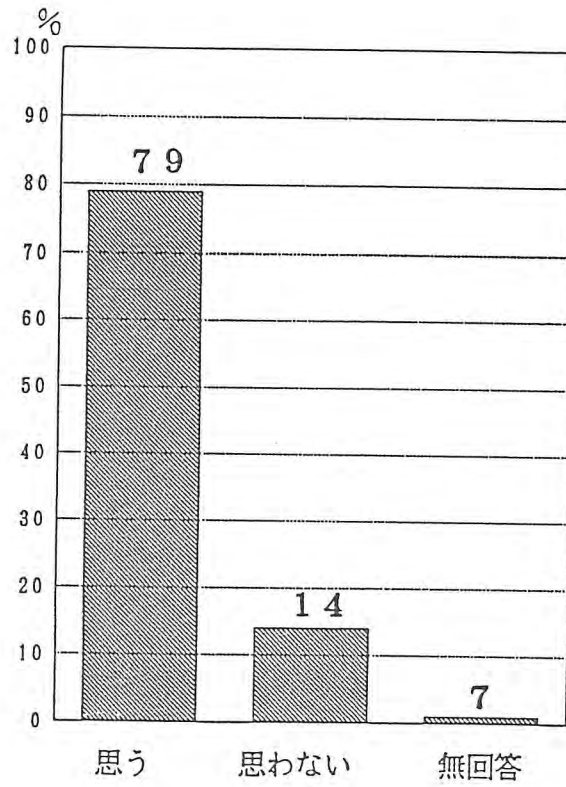
⑤ ドライログの品質はいかがでしたか

図-4



⑥ 今後国有林のドライログを購入したいと思うか

図-5



⑦ 今後のドライログの販売量について

図-6

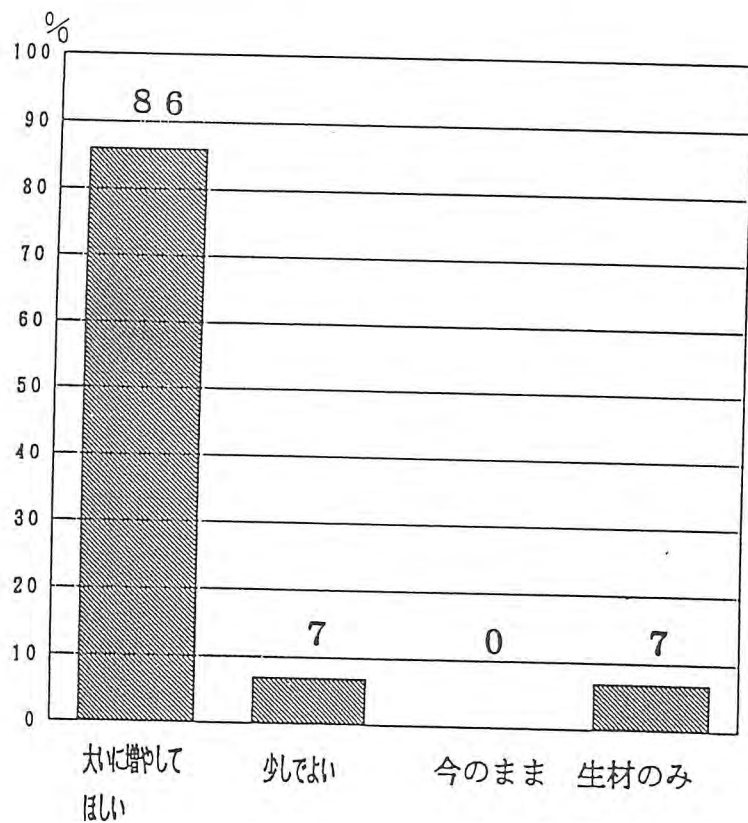


図-7

⑧ トラックの運材規制によりどのように対処しているか

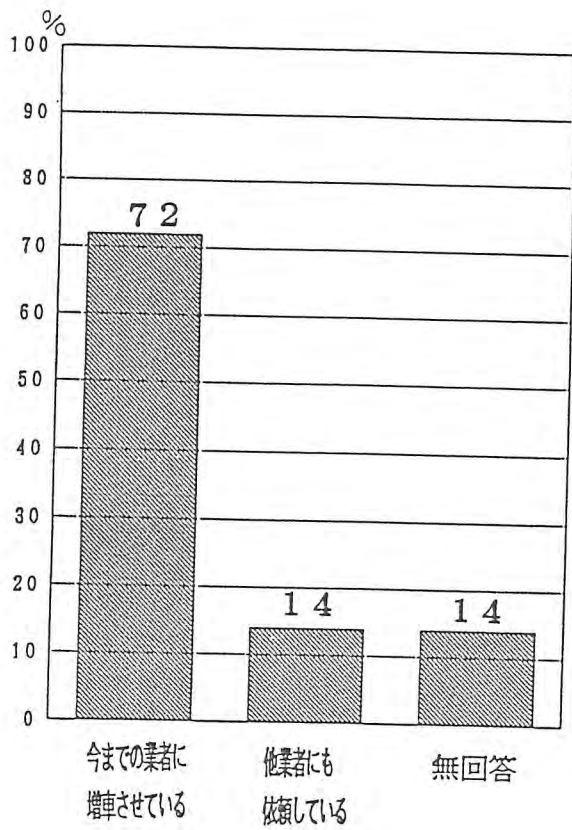
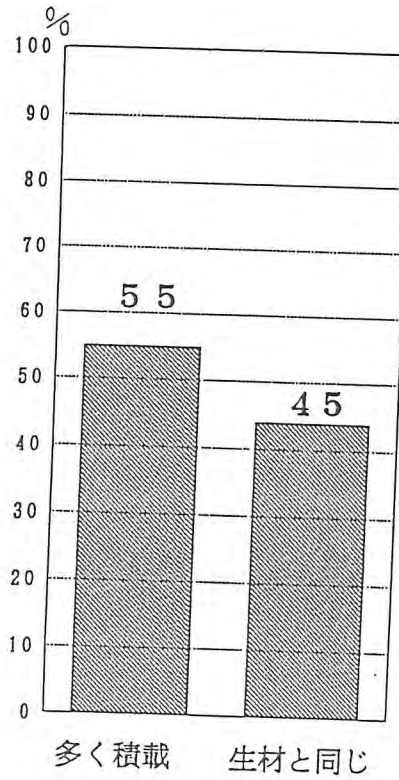


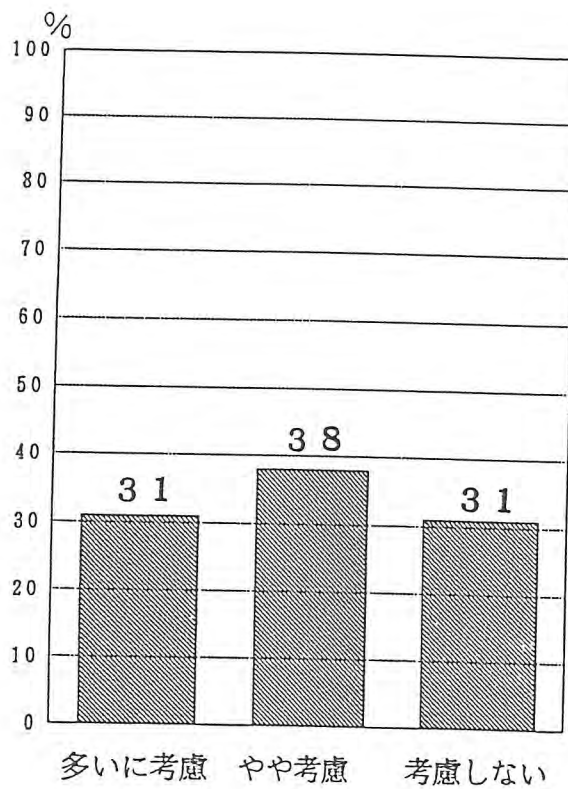
図-8

⑨ ドライログ材のトラック運搬について



⑩ 入札に際して価格面でドライログ材と言うことで考慮して応札しているか

図-9

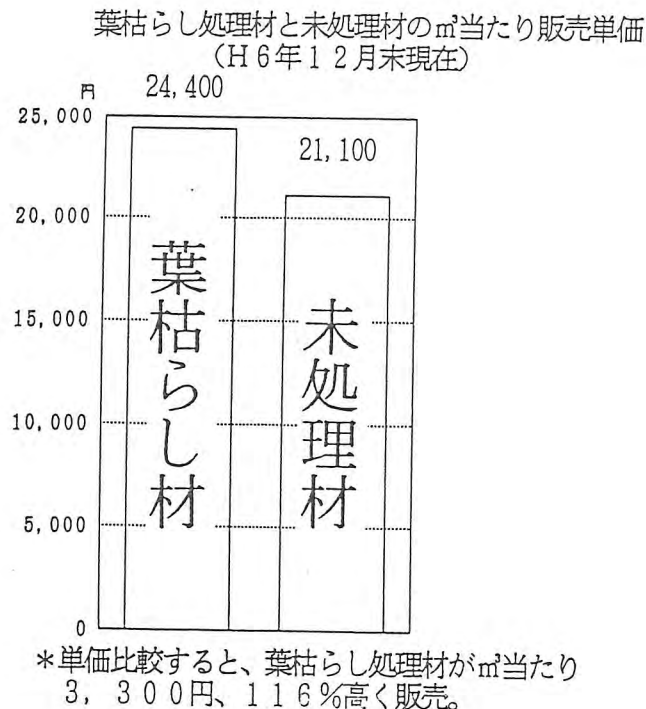


以上の結果を分析すると次のようなことが考えられる。

- 設問1-3 『ドライログ』という名称についての関心度は90%をこえ、高いものとなっている。
- 設問4-5 『ドライログ』に対する品質評価は全般的に軽量・色つや等が良い等好意的に受けとめられている。
- 設問6-7 トラック過積載規制強化により、今まで以上に『ドライログ』材の生産・販売を強く望んでいることがわかる。
- 設問8-9 トラック過積載規制強化に伴い、トラック運搬に当たりたいへん苦慮している現状がうかがえ、今後ますます販売物件の運搬距離の遠近によって、販売動向に大きな影響を与えるものと思われる。
- 設問10 価格面においては、従来に比較し、考慮して入札に望んできていることがうかがえられる。

4 葉枯らし処理材と未処理材との販売結果の比較について

図-10



5 考察

記録づくめの猛暑の中、伐倒に入った8月以降も炎天下が続き、9月に入って降雨の多い日があったものの、まずまずの条件下で事業実行できた。

1) 各作業工程及び現場意見をまとめてみると、

伐倒本数(1人/日)では未処理材32.4本に対し処理材が35.1本、集材量(1日)では未処理材25.71 m³に対し処理材が33.14 m³といずれも葉枯らし材生産の工程がそれぞれ108%~128%上まわった。

また、直接事業実行した現場職員の意見を聞いてみても、材が非常に軽くなることにより、集材・巻立工程が容易であったという意見が大勢を占めており、作業の能率性及び安全確保の面においても大きな効果があった。

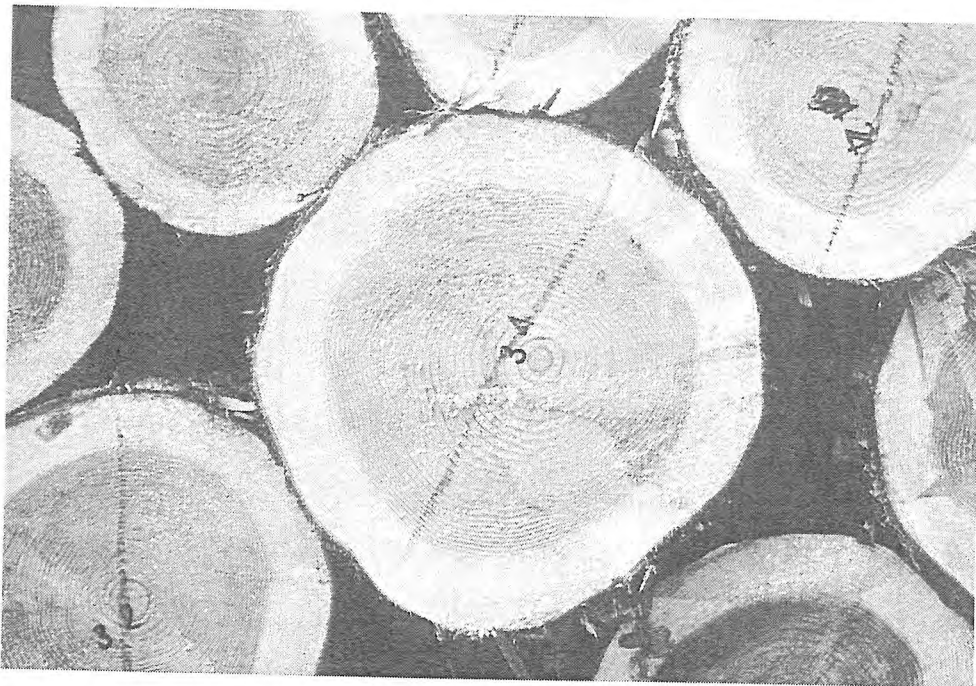
2) アンケート調査結果をみると、

いかに、業者の方々は軽い材の販売を強く望んでいることがはっきりと示されており、林齢にもあまりこだわらず、作業仕組等で効果的な『ドライログ』生産が可能であるならば、積極的に取り組んでいくことが肝要である。

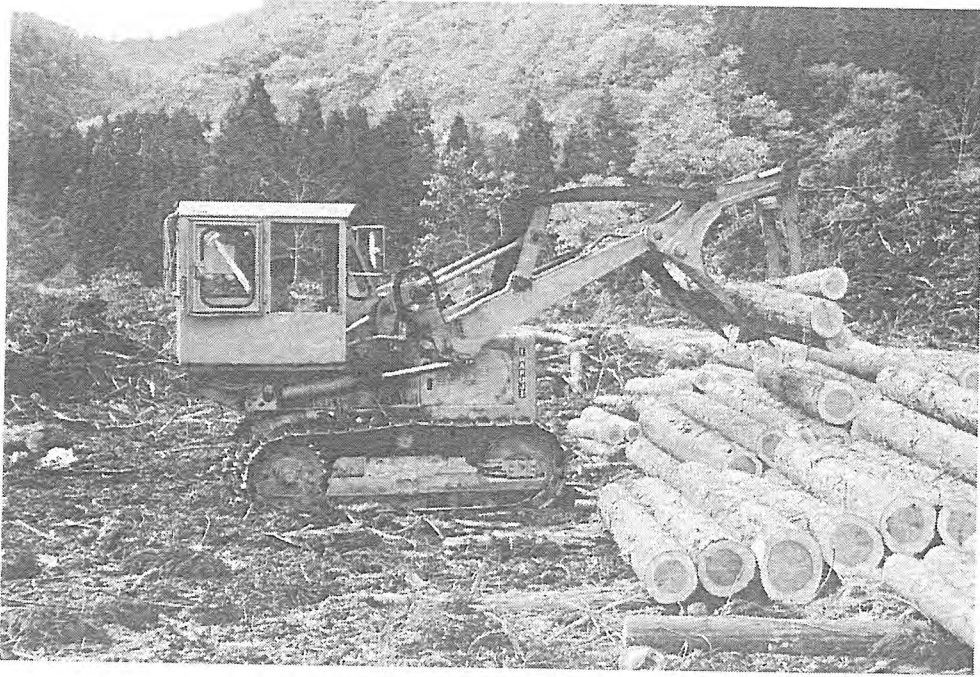
3) 販売状況について、

単価の単純比較については、図-10に示すとおり葉枯らし処理材がm³当たり3,300円、率にして116%ほど高く、また、公売結果における平均開差率でも、未処理材107%に対し、葉枯らし処理材112%と差は大きくはないが、確実に葉枯らし処理材が上まわっている。

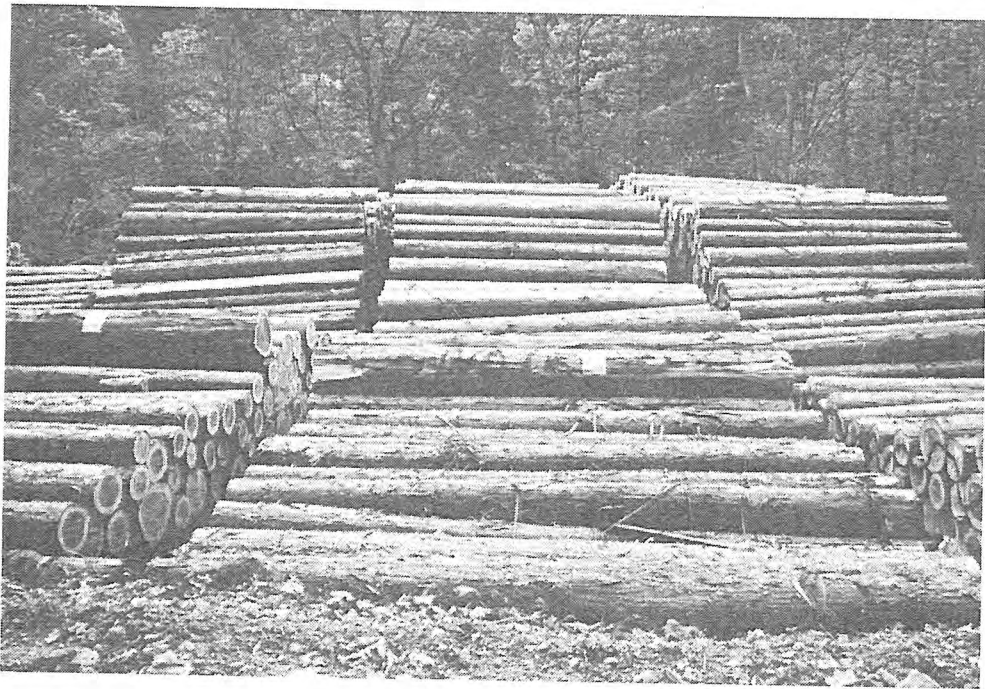
さらに、林齢が80年生をこえる葉枯らし処理材については、m³当たり5万円で売れており、葉枯らし処理することによるメリットがあらわれている。



写-4 葉枯らし材(ドライログ)として販売



写-5 ログローダによる
葉枯らし材の巻立



写-6 市場への出番を待つ
葉枯らし材

6 おわりに

今までは、生産さえすれば、どちらかといえば容易に販売できた物件が、昨年トラックの過積載に対する規制が強化されてから、買受業者の方々は、材の買付け判断として材質の良否はもちろん、運賃コストの占める割合が高くなり、販売物件箇所の地理的度合いで大きな販売格差が出てきている。

木材業界からも、トラック積載量軽減対策の一環として、乾燥材の生産推進が要請されており、その要請にこたえとともに、お客様に、いかに、買しやすい物件を供給できるかとなれば、それは販売材の軽量化に積極的に取り組まなければならないと考えている。

モノを作れば売れる時代から、いかに買しやすいモノを安定的に提供できるかが、我々生産現場に課せられた問題と認識し、今後ますます激しくなる産地間競争に打ち勝つため、現場職員一人一人が創意工夫をしながら今後の事業をすすめていきたいと考えている。



写-7 トラックへの積み込み状況